

し。今少し大きなるを示されよ、よき處よまれたり。蝶々子の今様前の秋閑居と同じく寫し得たれど  
宣長の「世のうき事はのがれすむ、柴のあみ戸にさすが又、あらしの音の身にしてみても都こひしき山の  
なく」の。幽にまた活氣あるを見れば君のは獨り世捨人の如し。今様は優美にして口にとどなへて妙なり。  
皆の人少しく之に心をよせられずや。書終てかえり見れば拙き言のみなめげなる中々に恐ろし、あ  
なかしこに平伏と白す。

## 雜 報

### 兔 狩

天漸く寒く、紅葉霜に飽きて、山色愈美なり。我  
校有爲の士、豈に此好期を空しくせんや。則ち本  
月初日を卜し、青鞋白霜を踏んで、大に狡兔を東  
西の兩山に狩る。東山組は分れて第一第二の二  
手となり、前日先づ發して錦野村に宿す。人數各  
々四十名許。翌曉分れて山に攀ぢ、霜を踏み、巖  
を登り、相呼び、相應へ、身を叢林の中に没して  
疾驅奔走せり。西山組は當日午前二時半を以て  
校門を出づ。人數約七十名。曉天未だ曙光を放た  
ざるに、共に連ねて山逕に入り、明るるを待たず

して、はつづくの聲は、既に四周の木靈に響け  
り。荆棘を排除え、榛莽を蹂躪え、氣焰萬丈、蘇岳  
の煙と争ひ、胸襟廣潤、紫海の波にたぐふべし。  
追ふこと數次、日漸く傾き、歸路亦遙かなるを以  
て、終に勇を抑へ、愛を割きて歸る。歸來獲物を  
檢すれば、東山第一組兔五頭、全第二組兔四頭及  
山鳥一羽、西山組兔七頭、西山組去處に比して意  
氣頗る豪然たりき。且日午下、雨天体操場に會し  
て獲物開を催ふす。昨の勞を思ひて、兎飯一層の  
美味を覺へき。此一舉實に近來の大壯快、其獲る  
所豈啻に羽毛の属に止まらんや。

演說會概況

瑞邦館裏溽熱に苦みしも昨日の如くにして、今は既に教場の中、暖爐の火熾なるを見る。歳華勿とて第一學期亦將に逝うんとす。是に於て最終の演說會ハ開かれたり、正に是れ十二月七日。擊拆既に鳴りて開會は報せられ、生徒漸く集りて立錫の地なし。湯原部長先づ立つて、『學術と迷信』とに就きて演せらる。詳細に至ては先生の手稿を請うてわが雜誌の論說欄に掲ぐべきを以て、就いて熟覽する所あれ、其立論の斬新にして有益なる、吾儕亦何ぞ言ふを須たんや。中川會長次て一場の『雜話』を陳べらる、諄々懇々の辭、吾儕素より服膺せざるべからざる所也。終りて吾校の快男兒永峰安三郎立つ、拍手屋を動らし、喝采堂に溢る。

客歲征清の事あるや、皇師連りに大捷を占め、豚群遂に來り降る。日東帝國の武威遠く異域に及び、扶桑男兒の義烈長に萬古を照す。皇德に由ると雖も、亦實に軍人忠勇の致す所。吾儕學窓に在るものと雖も、夢魂屢飛んで遼東の山野を繚

繞き、坐に軍人諸士の勇壯を欽じたりき。爾來數々從軍の士に囑して其經歷の快態を聽くことを得、大に感奮する所なしとせず。其奮戰苦闘のこどハ言ふを俟たず。寒風凜烈肌を硬し、飛雪續紛面を撲つるとき、敵營の火光閃として明滅するを望み、哨兵線に立つて徐に動靜を偵ふ兵士の苦を想ひ、熱塵茫茫として征路濛々、紅日灼爍とて草木萎むるとき、滿目の原野渺として一村落を見ざる處、銃劍を擔ふて遠く行進を繼ぐ軍隊の艱を思ひ、顧みて日夜靜に史書を繕ぐ吾儕の安樂に及びては、吾儕實に軍人諸士に對して大に感謝の意を致すこと更に切なるものありき。從軍談の豫告揭示せらる、毎に演說會の出席者堂に盈たざるなかりしは、實に吾校生徒の之れを待つこと如何に切なりしを知るに足る。而して今や吾同窓の士よりして親しく其從軍の壯語を聽く、感殊に切にして興更に深ま。永峰君ハ壹州浪高く風怒る處の人、嘗て兵役を終へて吾校に復し、昨年軍曹の職を以て軍に従ひ、千艱を嘗め、萬難を經、歸りて再び吾校に入る。天皇その戰功を嘉し、賜ふに勳章及び金を

## 擊劍部報告

以てせらる。嗚呼君の光榮大なりといふべし。君は先づ軍人としての氣焰を吐きぬ。慄弱遊惰の輩を叱咤えて、國民兵役の義務を喝破し、尙武の氣象、報國の熱誠闕ぐべからざるを痛論するに至りては、意氣雄壯、懦夫をえて慙死せしむるに足り、拍手の聲殆ど人耳を聳せんばありありき。冒頭の議論終りて實歴談に移る。船中の窮屈、露營の艱苦、一々親ま之を聴けば、誠に吾儕が想像以上の感あり。平壤より、豊嶋沖より、花園口より、二龍山まで、或は圖を描いて之を説き、或は態を加へて之を示す。戦闘の狀、配陣の景、殆んど目観するの想あり、或は哨兵に立ち、或は行進をなすに當りて、其嘗め來りたる辛苦に至りては、口豈言ひ易からんや、而して吾儕の不文亦何ぞ能く之を傳へんや。滿堂の健兒皆手を拍き、殆んど膝の進むを覺えず。談話終るとき既に五時、乃ち會を閉づ。

明治乙未の演說會此壯快なる談話を以て終る。歳改まりて再び一堂に相見るとき、共に新なる希望と新なる活氣とを以て、益斯會の隆盛を期せん。

一去一來は却て人生の奇觀にまて、又た多少改良進歩の段階たり。吾校去夏卒業生を出し、より、擊劍部の先輩、頼に十數名を減すと雖ども、新學年の始めに於て、再び此道の熱誠家、數十名の多きを得たり。爾來憂々の聲日に盛んに、新々舊々、將た新舊、互に合ひ互に打ちて、術を闘はし、業を練ること三閱月、其技其量略ぼ既に定まればり。則ち委員は報告して曰く

中山 準作 家入 惟貴

二級に進級

賀來佐實太郎 松原 常興

三級に進級

蟻田 仁策 近藤 精一

四級に進級

堀尾 揆一

二級に編入

三津家定治 佐々 徳治 岩佐 尙一 徳永 吉次

川崎齋一郎 國武 得眞

三級に編入

木下 琢治 内藤 辰熊 鈴木 義夫 竹崎 青吉

田岡 増猪 石崎 芳吉 野口 常治 淺見 一

安武 未熊 五藤 速水

四級に編入

竹添 一熊 澤村 秀雄 大西正太郎 樋口 久太  
 深田千太郎 小野信一郎 福島 清 井島 義雄  
 小林 吉人 中村 精一 川崎 富一 生田恭四郎  
 赤間富次郎 五十嵐 力 勝部國之助  
 五級に編入 十二月四日

射 納 式

歲月流るゝが如く、倏忽とて早や既に明治二十八年も終へなんとす。弓術部是に於てか、例の閑雅幽遠の松間に依り、いとも森嚴なる射納式を行ふ。來會者先づ中川學校長、杉山部長、生駒師範を始めとし、大浦、山崎、東の諸先生、及生徒十數名、皆愴忙の中、餘裕ありけに居並はれたり。此日、夜來の六花皓々とて地上に布き、半ばは既に解けて冷氣頓に催ふし、加之、細雨霏々とて衣襟を濕ほし、北風凜々として横に面を吹く。然れども熱心誠意の本部員、寒さは物かは、孰れも左袒赤手を展べ、交々起ち代るゝ、射る。或はさながら式を忘れて退かんとし、或は痛く耳朶を打て弦を恨み、或は振腕蹈地其的中に近うりしを惜み、或は舌を捲きて其意外に遠ざうりしを驚くなど、靜肅の中往々愛嬌の花を咲

かしめたり。殊に興味を感せ乏は、源平第二回の勝負にして、第一組は、寺井氏を除くの外、悉く教職員の諸氏より成り、第二組も、亦獨り校長を戴く外、総て生徒の組合なりき。偕兼て達道の譽れなる東氏の、瞳子の銳と手先の練とは過またらず、見事八寸徑の的の右下を射貫きたり。乙矢亦的中す。東氏はこれ一組四ツ射の位に當らるゝ者。其一矢は既に二矢に適き、二矢は即ち四矢を値ひず。一組の面々得々とて、心中窃かに茶菓を期せり。蓋茶菓は、勝てる味方の贏利なればなり。二組未だ、校長の一矢功を奏せ乏のみなるを以て、頗る喪窮の色ありしが、例の賀來君、巧妙の腕前もて、ふつと切て放つ矢に、鏝と最なるの星を射る。八嶋の沖にはあらねども、暫しハ讚聲止まざりき。賀來君も二組の四ツ射、去かも星、其一矢は以て立ちに東氏の二矢を躡へり。されば危きを變じて安きに歸し、敗を轉じて勝と爲す。さすかは委員、感服敬服。次で本式金のに遷る。雜報子尙ほ親しく式を觀しも、此後の事、部員某氏の批評あれば、左に掲げて記事に代ゆ。

去る十二月十三日、わが弓術部にてハ納會の催

ありき。批評子少しく遅れて臨場しければ、源平の試合を見ざりしが、三時半頃より定め如く金の競射ありければ、例により酷評を試む。此日天雪を飛し、寒さ虞をさす計り、さすがは九州男子、其場に臨めば凜乎として寒威を怖れざる風情、感服の外なし。されど、前回の古顔に欠席多かりしは大々的の残念にして、新顔の出席多かりしは此の部の爲に喜ぶ所なり。當日は如何なる故か、割合に不出來にて、的は四回迄音もなく、五回目に見ん事破られぬ。さて細評に入りて、近藤君、爾來勉勵の功顯れ、めつさりの上達では如何に。あだかも處女の如く見ゆるは残念の至り。さて賀來君は矢張り見事に上達しぬ。態度は實に申分なきも。今少しまどやかにせられれば如何にや。次に吉田美君、君は下地ある射手の如く思はるれど、惜むらくは早きに過と思ひしが、さて寺井君、近來氣の毒にも押手に敗を取られて、兎角思ふ如く行ぬ様なりしは残念々々。まかし前回はやけの反對は、全たく去られし様に見受けぬ。賀すべし。吉田道君、中々の御手

際、まさに中原の鹿は君の手に落ちなむとせしが、惜しむと人に呼せて止みけるは残念。次に望月氏、驚く程の上達、放ちし後体も屈まず、態度もよし。之を前回に比せば、げに月鼈の差と云ふも不可なきが如き。かくて數回の後遂に中原の鹿を獲て、獨り月桂冠の榮を得たまひしは、即ち杉山先生なり。部長萬歳!!!。此に五時を過しければ、會を終りぬ。妄評多罪。(批評子投)

## 武裝檢査

武裝檢査は十六日十八日の兩日を以て、練兵場に行われぬ。朔風凜々、寒風肌を劈く裡に立ち、號令嚴肅、風紀整齊、銃を肩にし、劍を腰にまて、武裝の檢査を受く。中川學校長、沼田大尉、三池、寺本兩教官は、丁寧に武裝の檢査をなし終りて分列式を舉行されたり。眞にこれ風紀上、平生の苦心を表彰し且將來に偉大の効果を收むる良法に非ずして何んぞや。

## 寄贈の寫眞

を納めて、新たに雜誌部文庫に掲げたる匾額三

つ。一は佐久間教授の賜にして、戰艦八艘。松嶋千代田吉野巖崎高千穂秋津州、孰れも皆長崎港にて撮影したるもの。勢威凜然四傍を壓す。殊に松嶋鑑の如き、正に船渠に在りて修繕せらるゝの狀、觀る者をして思はず戰勝の餘光を感ぜしむ。他の二は、在福岡修猷館平山虎雄氏の贈る所にして、其二筑前志麻郡大門の景を入れ、其二同國早良郡小戸より生野濱遠望と、福岡市全景及耶馬溪諸勝とを納めたり。共に山貌水態活濯として寫順の外に顯るゝ中にも、耶馬溪の諸勝は、頼翁が嘗て瓢を傾けて猪肉を食ひ乏跡、合公に向つて其風景を罵りし奇刹、雨を犯して溪水を渡り乏邊を忍び、趣味津々として樂云ふべからず。吾儕は信ず、這般修學旅行者の胸臆に畫かれたる山靈水神、髣髴とえて、永く此眞影と共に朽らざることを。

嗚呼悲哉宮川修平君

君ハ篤實謹直の人、去歲肺患に罹りて學を休め、頃者校を退きて當地病院に加療せらる。藥石効あり。快癒望を囑せしに、晏天無情、病勢一變し

て、遂に幽冥不歸の客と爲られたり。それ死は二のみ。然れども、前途多望の好青年、寧んぞ稚兒耄耄と比すべけんや。十年の苦學一朝にして水泡に歸え、五尺の男子空まゝ墓邊一片の煙と化す。これを聞く者、假へ一面識なきも、誰か嗚咽せざらんや。況んや、多年同窓の好を有する者に於てをや。嗟呼、曩きには永淵君を失ひ、今亦此訃音に接す。痛恨何ぞ堪えん。白川の流れば絶えずして、乏かも元の水に非ず。龍山の落葉、豈に復た舊枝に還る期あらんや。余輩は茲に深く哀悼の意を表すると共に、幻然其瘠容を懷ぶ。

二 音 信

は來れり。電音に非ずして一對の書信なり。何處より。曰く朝鮮、曰く臺灣。

拜啓仕候小生儀去る頃外交官補に任せられ去る廿日東京出發昨廿九日當地に着し候間爾今御手紙を被下候節者在京城日本公使館宛に被成下度候先者右御報迄

朝鮮國京城

廿八年十月三十日

加藤本四郎

## 日本熊本第五高等校

辱知諸君

拜呈諸君益御壯健御勉強被遊御座候段大賀之至に御座候小生在校中ハ一方ならざる御懇切を蒙り感謝之至に不堪候然るに生儀不幸にして同級生たりし諸君と共に進んで大學に入るを得ず遂に流れ〜て臺灣迄渡航致す事に相成り諸君に對之甚だ赤面の至に御座候されども臺灣ハ極面白き處にて早晚諸君の御渡臺必有事と信じ申候其節者御案内可申上今より樂み居申候猶向後とも御交際の程御願申上候國家多事御自愛祈之

十二月一日

臺地 松本喜四雄

### 第五高等學校

龍南會員諸君御中

因云。加藤氏は本校第一回の卒業生にして、這般大學を出でられ、現に外交官補の職を奉せらるゝもの。頃日來、同氏より漢城新報の寄贈を辱うす。松本氏は、去る七月本校を卒へられ、今は陸軍通譯と爲りて、我が新領地の總

督府に仕へらるゝ者。共に我會に對する厚情を鳴謝す。

## 歲暮の辭

朝々繁霜慘凜原頭の枯草は名残なく斷ちぬ。暮々朔風淅瀝、林間の瘦梢は憐にも折れぬ。天寒く地暗ふして、明治二十八年は匆匆として將に暮れなむとす。玻璃窓下、三更人定りて萬籟寂々たる時、一穗の青燈を剪りて簡編を繕く。試に首を回らして熟々歲月の流るゝが如きを思ひ、過去に起りて幾多の快樂、幾多の苦痛を追想ふれば、一片の暗愁、源々として心頭に迸るを覺ゆ。嗚呼過ぎ去りにし一年間に、學術の進歩は如何、道義の涵養は如何。觀じ去り觀じ來らば、茫として夢の如く、誰かは感慨の情胸に滿ちて、懊恨の涙を浮べざらむや。されど過去は追ふべからず、追ふべからずといへども雲烟過眼に付することなかれ。宜しく回顧せよ、深察せよ、渠は必ず吾儕の耳邊に來りて、親切に將來の方向を囁かむ。看よ、枯草は霜に剪られて斷ちても、瘦

梢ハ風に咽びて折れしと、己に一道の陽氣は脉々として蘇らむとす。黃鳥は幽谷に潜めども、翼を治むるにあらまや。梅花ハ枝上に開かざれども、蕾は己に結べるにあらまや。

謹て告ぐ

乙未歲茲に逼り、吾會の雜誌本號を以て實に本年の終刊となす。回顧すれば、紙面蕪雜にして光彩なく、文辭醜劣にして氣焰乏し、誠に慙愧に堪へず。冀くは歲改まりて陽氣復すととき、更に筆硯を新にきて相見えん。諸兄幸に益々文想を養ひ、わが雜誌をして愈一段の進歩あらしめよ。敢て望む。

文庫寄贈書目 (七月以降)

伏敵篇	一	寄贈者	故栗屋五百藏君知友
同附錄	一		
歐洲新政史	二		
海國兵談	五		
Taokoon	二		
經濟地理	一		
爲換及外國貿易	一		

日本海運論	一	全	湯原教授
國際公法	一	全	湯原教授
歐洲戰國策	一	全	湯原教授
各國條約書	一	全	湯原教授
老子講義	一	全	湯原教授
Japan and the Japanese	一	全	湯原教授
Social Science	一	全	湯原教授
詩法詳論	二	全	湯原教授
明治碑文集	二	全	湯原教授
斯文會雜誌	二〇	全	湯原教授
國光	一三	全	湯原教授
教育時論	一七	全	湯原教授
東洋學藝雜誌	六	全	湯原教授
朝鮮西北利紀行	二	全	湯原教授
數學報知合本	二	全	湯原教授
蒼龍篇年譜	二	全	湯原教授
史海	二	全	湯原教授
莊園考	二	全	湯原教授
化學計算問題集	二	全	湯原教授
錦溪集初編	二	全	湯原教授
文蛤ノ觀察	二	全	湯原教授
蘆林第十七號	二	全	湯原教授
節婦阿政之傳	二	全	湯原教授
勅語演說	二	全	湯原教授
山高水長集	三	全	湯原教授
聖武記探要	三	全	湯原教授
老子道德經解	三	全	湯原教授
明徴錄	六	全	湯原教授
再春館會約	六	全	湯原教授
日本赤十字四十號	六	全	湯原教授